

大人計画公演 ちゃん切りたい

1995年12月16日〜30日 シアタートップス

キャスト

池津祥子……………ナミエ
阿部サダヲ……………ナハヒコ／比嘉／レフリー
伊勢志摩……………キリコ
顔田顔彦……………セイキ
桑畑虚……………ミヨウコ

皆川猿時……………黒犬／捕虜2／モデル男
田村たがめ……………アバズレ／水着美女4／女1
正名僕蔵……………カモシタ
田中芳幸……………不思議芳幸

宮藤官九郎……………アエギ／ナルセ

山本密……………ミツ／ヤマギシ／万座／与太／男2

片葉みはる……………ノリ／水着美女1

宮崎吐夢……………アヤ／捕虜3／男／ドクター

村杉蟬之介……………ヒロ／捕虜1／安里／コメディアン／男1

猫背椿……………マチヤコ／女子1／不良女／水着美女3／

女2

松尾スズキ……………カオル／さば次郎／餅屋／声3

鈴川麻王……………エマ／女子2／子供／モデル女／水着美女

2／娘／声1

穴戸美和公……………マダム／女／ツネ／妻／声2

あとがき

これは演出、けっこうこだわってます。細かい。ミュージカルにするってことでナーバスになってたから、人が歌い出してもいいような演技形態にするのに気を使いましたね。それまで『愛の罰』(97年)とか『嘘は罪』(94年)でリアルにしてきたものを、ちよつとリアルじゃない、作り込んだ感じにして。参考にしたのは増村保造の古い映画。あれって役者がみんな力入ってるじゃないですか。そういうのを意図的にとり入れたんですよ。みんなにその映画を見てもらって、こういうのおもしろいでしょ、ここでこんな動きするわけないのにしてるでしょって言って。だから、他の作品とちよつと演技が違うんですよ、力入ってる(笑)。

一応、俺も曲作ってます。詩を書いて、鼻歌をテレコに吹き込んで、それを作曲家に起こしてもらってっていう作業をして。

何によってミュージカルを規定するかって話なんですけど、僕はただ劇中に歌と踊りが入るものをミュージカルって言ってるだけですね。ミュージカルっていうと歌いあげて「とか」「高らかに」とか「人間賛歌」っていう既製概念を壊したいっていうのがあるんですよ。もつと自由に歌とか踊りとかが入ることをよしとしていかないと。

芝居ってというのは何が起ころってでもいい自由な空間だから、情報誌でも別にストレートプレイとミュージカルって分ける必要ないと思うんですけどね。どんなストレートプレイだって突然歌いはじめてもいいわけだし。俺は『悪霊』(97年)でも、わざとミュージカルっぽく歌を入れたりとかね。普通の芝居なのに。そういう反抗心があるんですよ。だからこの『ちゃん切りたい』は、それがわかりやすいかたちで出たものだと思う。

もったいないって思うんですよ。そうやってミュージカルっていう狭いカテゴリに、歌と踊りを閉じこめてしまうことが。だってすこく上手くなくても単純に人が歌って踊ってる姿っておもしろいじゃないですか。すごい訓練をした人だけのものではないはずですよ。だってすごい訓練をした人の歌と踊りってつまんなかったりするんですよ。オーディションとかやって思ったんだけど、歌も踊りも上手いのに、キミつまんないなっていうさあ。だからそここのところの枠組をとっばらうことで、そういうこともできるけどおもしろい人がでてきたりすると思うんですよ。

ウッディ・アレンの『世界中にアイラブユー』って映画でもミュージカルやってて、あのやり方もおもしろいなあと思いました。特に歌えもしないし踊れもしない人たちが歌い踊るっていう姿。そこに価値があるんじゃないかな。

これは輪廻転生の話ですね。天使と悪魔が出てきて。普通人がミュージカルにしないような題材を選ぶ、という試み。別にミュージカルのパロディっていうつもりはなくて、要するにくだらないうってことですよ。くだらないうってものを表現するときに、なるだけ下手じゃない方がいいと思うんですよ。逆に。上手いにくだらないうことをやってる。そこが重要なんだけどもね。(2000年3月談)